



## 逃げるという意思決定

東京大学大学院 情報学環 特任教授 かた だ としたか 片田 敏孝

インタビューおよび文責 創価中学校 わたなべ けい こ 渡邊 啓子

東日本大震災で、中学生が主体的に行動して多くの人を連れて避難し、助かったことは「釜石の奇跡」として理科の教科書にも掲載されています。一方で、地震が起きたときに、すぐに避難行動に結びつかないのが現状です。このような点で、防災とごみ問題は一見して全く関係ないように思えますが「わかつてはいるものの、個人ではなかなか行動できない」といったことが共通していると思います。そこで、どのような声かけや取り組みを通して、人の心を動かしてきたのか。震災が起きる8年前から釜石へ通い、津波防災教育を継続してきた片田敏孝先生にお話を伺いました。

私は、防災は「とにかく命を守ることが第一」だと考えています。日本における防災はどちらかというと「被災したときにはどのように復旧・復興するのか」という議論が多かったと思うのですが、私はそれ以前に災害で人が死んではいけないとの思いで取り組んでいます。釜石で亡くなられた方のことも忘れず、もっと自分に出来ることがあったのではないかと考えています。

### 心からの納得を生むためには？ ～コミュニケーションデザイン～

人間は「納得」しないと行動に結びつかないと思います。「説得」とは頭でわかることなのですが「納得」するためには、本人が心の底から共感し、腑に落ちなければいけません。そのためには「相手の視座に立ったときに何が見えているのか？」を大切に「なるほど！ そうなんだ」と相手が思える

だけのコミュニケーションができなければならないと思います。

残念なことに、地震により倒れた家具の下敷きになって亡くなる、地震に続いて発生した津波に巻き込まれて亡くなる、という事例があります。それらを防ぐためには家具の固定や避難が大切ですが、実際に行動に結びつけるにはどのようにしたらよいかを考えて、ある地域の学校で授業をしました。それは、子どもたちとコミュニケーションをとりながら、自分自身や自分の大切な人が、もし家具の下敷きになったらどうするのか？を想像して「必ず対策をしよう」と内発的な決意を誘発する対話型の授業です。

具体的には「もし家具の固定をしておらず、お母さんが家具の下敷きになってしまったとする。もうすぐ津波が来る。お母さんは私のことはおいて逃げなさいという。さあ、君はどうする？」、「今

度は、もし君自身が家具の下敷きになってしまったら、君はどうする？自分をおいていってと言う？それとも一人で死んでしまうのは嫌だと言って一緒にいてもらう？」と問いかけます。中には、想像して泣き出す子も出てきます。そこで続けて「嫌な思いをさせてごめんね。先生は防災の専門家だけれども、実は先生自身もどうしたらよいか、正解はわからない。自分にも娘がいるけれど、娘をおいて逃げることはできない。一緒にとどまると思う。」と、自分の思いを語ります。最後に「でもね。なぜこのような嫌なことを私たちは考えないといけなかったのだろうか？…それはね、家具が倒れたからなんだ。今なんだ。今ならばこのような嫌なことを考えなくて済むんだ。だから家具の固定をやらなきゃいけないんだ。」と話す頃には、子どもたちの中から自発的に「家具の固定を絶対にやろう！」という気持ちが生まれています。その結果、子どもたちは親に頼んで、週末にはその地域のホームセンターで家具の固定用具が売り切れたようです。

### 「自分は大丈夫である」という気持ちを変えるためには？

災害が起きたときに、人間はどうしても「自分は大丈夫である」という正常性バイアスがはたらき、逃げ遅れることにつながりがちです。

しかし「(母・父・祖父母など)自分のことを大切に思っている人」との命の関わり合いの中で自分の命を見つめなおしたときに、正常性バイア

スを逆の方向へはたらかせ、命を守る行動につながるすることができます。

防災は、人間と人間との支え合いです。「自分のことはさておき」としないためにはどうしたらよいか、それは、自分の大切な人の命を考えたとき、行動につながります。

また、人と人とのつながりが大切ですから、防災への取り組みは、個人で行うよりも、家庭・地域・学校で連携するほうが効果は大きいと感じます。また「逃げなさい」という言葉の連呼だけでは、それほど効果はありません。客観的なリスク情報だけではだめです。災害を通じて、大切な人が自分のことを想ってくれていると改めて考えたときに、人は初めて「逃げよう」という内発的な意識につながっていきます。

### 地域のことを誇りにし、大切にしていこうという思いが大事

私は、自然を通じて「災い」としての防災教育を行うことに対して違和感をもっています。まずは地域のことを好きになり、地域のことを大切にする思いが大事です。

「未来永劫、一番大事なことは何か。これだけ自然に近づいて恩恵を受けているのですから、50年・100年・1000年に1度といった、自然が荒ぶるとき、その日その時だけきちんと対応する。それがその地域からの恵みを受けるための条件であり、住むためのお作法です」。このように、その地域の住民が前向きに捉えられるように、災害リスクの説明の仕方を考えました。大好きな



写真1 震災前に釜石市の子どもたちに避難マップ作りを指導する片田教授

釜石をみんなで大切にしていこうと理解をさせたかったのです。

また、逃げないことをもってダメだと断ずることはありません。人間なのだから当たり前です。今のうちでできることを考えて、災害が起きたその時だけきちんと対応できるようにしましょう。

### 避難三原則～想定にとらわれるな・最善をつくす・率先避難者たれ～

避難三原則について「想定にとらわれるな」を最初に挙げました。わかりやすいというハザードマップを信じすぎないということです。人は知識として得た情報を正しいと考えてしまいます。ハザードマップは過去に起きた災害の規模と同程度の想定で作成されています。しかし自然というものは何ができるかわかりません。ですから、ハザードマップを信じすぎはいけません。また、大きな想定だからといって絶望する必要もなく、小さな想定だからといって安心してはいけません。

2つ目は「最善をつくす」です。大

事なことは「その時に最善をつくす」ことです。最善というのは、これ以上やろうとしてもできないということです。「大事なことは君が最善をつくすこと、それぞれで最善をつくすこと」と子どもたちに伝えています。

3つ目の「率先避難者たれ」は、集団同調を導くためです。私たち大人も、非常ベルが鳴ったときにどうするか。すぐにはなかなか逃げないですよね。このように、人間はアラートに対して、最初の情報は流してしまいます（初着情報の無視）。不安だから情報を受け流してしまいます。そして、次の情報を待たず、その間に逃げ遅れてしまいます。

地震が起きたときにテレビをつけて情報を待たずしてしまいますが、結局それは避難していません。逃げていないという状況は、みんなで不安なだけでなく、みんなで慰め合っている状況です。このような状況では人はなかなか逃げられません。そこで、子どもたちには次のように伝えています。「非常ベルが鳴ったときに一番に逃げた人は決して弱虫ではない。とても勇気が必要なこと。それが自分や周りの人の命を守ることにつながる。君が正しいと思うことは勇気をもって行動しよう」と。

実際に、釜石の中学生がとった行動について紹介します。中学校では校舎の耐震補強が完了していたため、3階に避難しようとしていたそうです。しかし、中学生が、もし3階に津波が到達したら逃げられないから高台へ逃げようとして提案しました。彼らは想定にと



写真2 2011年3月11日 鵜住居地区の避難の様子（住民提供）

らわれず、最善をつくしてくれました。小学生の頃から一緒に高台に逃げる訓練をくり返し行っていた成果だと思います。

逃げるという姿勢を導くための防災教育や、それを作るためのコミュニケーションデザインが重要です。また「リスク情報に対して人間は正しく対応できない」ということについての正しい理解が大切です。

### 想定にとらわれない～リスク情報への正しい理解と利便性を考える～

高知県のある町の町長より相談がありました。その地域には、南海トラフ地震での津波想定が34mというシミュレーション結果が出たため、やれることはやったけれど、これ以上、どのようにしたらよいのか、という相談でした。昔からこの地域では、大きな地震の後には大きな津波が来ることがわかって

います。しかしながら住民は何をきっかけにおびえだしたのか？津波想定34mというシミュレーション結果です。ただしこれは1000年に1回といわれる想定です。南海

トラフ地震は100年に1回といわれています。そのうちの10年に1回、確かに東日本大震災のようなことがあるから「出来る限りの最善をつくそう」ということが大切です。

1000年に1回起きるといわれる津波に対して、町民がおびえ切って自暴自棄になって何もしなくなるようではいけません。次に起こる津波が、1000年に1回起きる大きなものであるといっているわけではなく、リスクと利便性を考慮することです（例えば、飛行機です。短い時間で長距離を移動することが可能ですが、墜落のリスクはゼロではありません。しかし、利便性を考慮するととても便利な乗り物です）。

避けようのないリスクは確かにあります。そのような中で、利便との兼ね合いでリスクを理解していくことが大切です。1000年に1回といわれる津波に対応しないと防災にあらずというこ

とではありません。もちろん、やれるだけのことは精一杯やります。想定が出た以上は、それに向かってみんなで「リスクにおびえず明るく、できるできないではなく、やるんだ！」というような思いで対策に取り組みましょうと私は町長に訴え、現在も一緒に取り組みを続けています。

### 防災を通じた街づくり・人づくり

中学生くらいになると、地域の一員として貢献できるようになります。祖父母世代の方々は、最初は「どうせ津波を逃れてもそんなに長生きしないのだから」と、なかなか避難訓練に参加しようとしなかったのですが、孫世代の中学生に声をかけられて嬉しそうに参加されるようになりました。また、中学生は祖父母世代の方から「ありがとう」とお礼を言われて嬉しそうにします。このように、避難訓練を通して中学生は地域の一員としての役割の意識をもち始めることができ、自己肯定感の向上にもつながります。その結果、町が明るくとても良い地域になっています。祖父母世代のある方が詠まれた短歌から見る「心の変化」を書籍『人に寄り添う防災』(P.107ブックレビュー参照)にも書きましたが、あきらめの心を「自分のことを大切に思ってくれる人の存在」が変えたのです。

このように考えていくと、防災というのは、単に災いから逃れるという技術的なことや知識の範囲にとどめることではないと感じます。共通の敵にみんなで行き合って、それによって思

い合う気持ちの中で出来上がっていくコミュニティや、親子で思いやる心を確認しあうという、喜びの中で進めていく防災のほうが、実効性が高く、また副次的な効果も高いと感じます。

### 育みの環境の継続を

「文化」というと、大それた話に聞こえますが「育みの環境」だと思えます。これが時間的に維持されたときに文化となります。思いやりにあふれる街づくりのために、まずは10年間頑張ります。そうすると、12才の子は22才になり立派な大人になります。さらに10年頑張ります。そうすると、32才になり、中には親になりはじめる人もいます。このように、10年で市民を作り、もう10年で再生のメカニズムを与える、つまり、文化の礎を作ると考えたほうがよいと思います。

### 「仮想将来世代」としての街づくり

災害の犠牲者の大半はお年寄りです。2004(平成16)年から内閣府の会議に出て、ずっと、要配慮者の命をどう守るのかを議論していますが、最近私が言っていることは「要配慮者を健常者が助けて差し上げよう」という考え方は長続きしないからやめようということです。

地域の中には色々な年代の方がいらっしゃいます。みんなが幸せに生きられるようにするためには、不安を感じている人がいる状態を許してはダメだと思います。いつかは自分も歳をとります。当事者問題としての意識のさせ方

として、加齢に伴う問題については「仮想将来世代」というキーワードで取り組みを進め「健常者がお年寄りを助けて差し上げる」という考えは止めるべきだと思います。

### 実効性へ導くためのコミュニケーションプログラムが必要

おそらく、廃棄物問題やエネルギー問題も、自分が生きている間は、このままなんとかかなるでしょうと考えてスルーしてしまいがちです。しかし、そうではなくて、私たちは自分の子供や孫の世代に続いていくという、時間の流れの中で生きています。この先に描かれるものとしてこれでいいのか?というコミュニケーションプログラムが必要ですね。

さらに、防災の場合にはどうしても正常性バイアスが働いてしまいます。正常性バイアスそのものは否定してはいけないと思います。例えば人間はいつかは必ず死にますが、実際には「その日」を意識せずに曖昧にしているため、今日を心穏やかに生きていられます。それは正常性バイアスが働くからであり、そのこと自体は悪いことではあり

ません。しかし、災害については正常性バイアスが働くことで命が危険にさらされます。だからこそ、客観視できる「大切な人の命」に視座をうつさせるのです。あえて「自分の命」ではなく、視座を変えることで正常性バイアスを回避させる形のコミュニケーションの戦略を取ります。

大事なことは、その人にとってみれば、その人がとった行動は常に正しいのです。それは別の尺度からみたときに明らかに間違っていたとしても、その人の尺度の中ではそれは正しいのです。それを理解して、どういう視座に立ったときに、どういう尺度にしたらその考え方に至ったのかを考える必要があります。地域の方と話すときに大切なことは、必ず「なるほどね〜」や「そう考えればそうだね」と、その人の視座に立って考えることです。説得ではなく、納得から入るためにこの姿勢は非常に重要だと感じます。

防災や廃棄物という分野は違えども、常に実効性ということを頭に置きながら、コミュニケーションの大切さを意識しながら仕事をしないといけないと思います。

### 片田 敏孝 PROFILE

1960年岐阜県生まれ。1990年豊橋技術科学大学大学院博士課程修了。2005年より群馬大学工学部教授。2010年同大学広域首都圏防災研究センター長、2017年より東京大学大学院情報学環特任教授ならびに群馬大学名誉教授。専門は災害社会工学。内閣府中央防災会議や全国の自治体の防災会議委員を歴任。東日本大震災で、防災教育の成果を示した「釜石の奇跡」を導いた功績で2度の総理大臣表彰。著書は『人に寄り添う防災』、『人が死なない防災』(集英社新書)、『3.11釜石からの教訓 命を守る教育』(PHP研究所)など多数。

